



とらのもん

VOL. 42

発行 全国醸造機器工業組合

〒104-0054 東京都中央区勝どき2-18-1-518

Tel 03(5548)5890 fax 03(5548)5895

e-mail zjkk@zjkk.or.jp http://www.zjkk.or.jp

2010年新春セミナー&賀詞交歓会

去る1月25日、東京日比谷松本楼において平成22年「新春セミナー」ならびに「賀詞交歓会」が開催された。セミナーでは「新政権下での中小企業対策は」と題して全国中小企業団体中央会の及川勝政策推進部長が講演。続く賀詞交歓会には経済産業省の担当課長補佐、日本酒造組合中央会の副会長はじめ関係団体の代表などのご来賓を含め28名がつどい「経済の先行きに不安はあるが、不景気こそチャンス」との思いでこの一年を頑張ろうと力強い意思を新たにした。

第1部 新春セミナー

〈講演の要旨〉

日本経済の原動力である中小企業は、昨年秋以降の景気の急速な悪化により極めて厳しい経営状況に追い込まれている。

急激な景気後退の影響が地域経済を直撃し、地域間の格差拡大がますます懸念される状況になっている。

中小企業が活力を取り戻し、世界的な経済危機からいち早く脱却するためには、我が国産業の礎を支える中小企業に光を当てた大胆な政策が今こそ求められる。

このため、全国中小企業団体中央会は、下記に掲げた10項目を最優先に実現するよう、去る昨年11月に新政府に対して要望した。この要望に対し成果が出ている。



講師：全国中小企業団体中央会
政策推進部長 及川勝氏

「中小企業対策に関する新政権への要望」骨子

1、事業の確保を最優先とした「景気対策」の実施

金融、税制、財政をはじめ総合的な「景気対策」を。新産業の創出、新規需要を開拓する「経済成長戦略」の確実な推進により、中小企業の景況を一刻も早く回復を。

2、格差是正等を実現する中小企業予算の大幅増額

ものづくり中小企業の試作開発・販路開拓・人材養成、のための支援策を。

3、組織化政策の抜本的強化、組合制度の充実

4、中小企業団体中央会支援機能の強化

5、中小企業の実態に十分配慮した「雇用対策」の推進

中小企業の実態を無視した製造業派遣の禁止には反対。最低賃金については、中小企業の経営環境、雇用情勢、支払い能力の観点に配慮を。全国健康保険協会の国庫補助率の引き上げを。

6、中小企業金融・税制の充実

「中小企業者金融円滑化法」の早期成立を。信用保証制度の拡充を。法人税率の引き下げを。中小企業設備投資促進税制の延長等々。

7、下請取引適正化の抜本的強化

8、「環境と経済の両立」を可能とする地球温暖化対策の推進

CO2 排出量削減について、中小企業に与える影響と十分に踏まえて推進を。地球温暖化対策を新産業・新技術育成の好機と捉え、積極的に展開を。

9、中小企業の官公需受注機会の増大

10、社会インフラである生活幹線道路の整備

生活幹線道路とそのネットワークが持つ地域社会の生活上の視点の重視と道路整備の推進。高速道路無料化の実施に当たっては、さまざまな問題点に十分な配慮を。

第2部 「賀詞交歓会」

開宴の冒頭、挨拶に立った藤原理事長は「一昨年のリーマンショック以降経済の不安要因が残る中、昨年日本では歴史的な政権交代が行われた。景気は上向いてきているという報道もあるが、われわれはまだまだ実感がない。経済の先行きに対する不安はあるが、一方でこれはチャンスでもあると思う。『景気が悪い』と言っても仕方がない。こういう時こそ、攻めの経営で勝負していきたい」と話した。

来賓挨拶では、経済産業省産業機械課の木下課長補佐より「中小企業支援策については力を入れていくので、大いに活用してください」との言葉をいただいた。また、日本酒造組合中央会の浅見副会長は「厳しい環境にあるが、元気を失ってはいけない。食の産業は成熟産業で平和産業。しっかりとやっていけば前途はある。ピンチはチャンス。苦しいときほど原点に返った取り組みが必要で、酒造業界とともに力を合わせて今年1年、がんばっていこう」と話された。



当組合 藤原理事長



経済産業省産業機械課
木下課長補佐 (来賓挨拶)



日本酒造組合中央会
浅見副会長 (来賓挨拶)

ご来賓の方々



関東醸造用品組合 北村理事長
不況を乗り越えよう！ (乾杯挨拶)



懇談。話が弾み交流が！



当組合 喜多副理事長 中締め
「日本酒で高らかに乾杯三唱」！！！！



食品産業新聞にみる「醸造機械業界動向」／

(酒類産業新聞アンケート) 21酒造年度「日本酒生産計画」

更新需要先延ばしなど国内市場伸び悩む

海外への輸出に一定の動き

醸造機械・資材市場は、安定的なメンテナンス需要はあるものの、最近の消費不況を背景に更新需要の先延ばし傾向が一部で見られ昨前半から受注環境が厳しくなっている。その一方で、国内市場の伸び悩みをカバーするため、世界的な日本食ブームを背景に海外への輸出に一定の動きが出ている。

(伊藤 飯塚)

醸造業界の機械・資材に関する動きを概観する。

日本酒は相変わらず需要の減少が続いているが、普通酒の減りが大きい反面、純米酒などの特定名称酒は善戦しており、これに焦点を絞った小型発酵タンクや洗米浸漬装置、瓶詰機など少量多品種製造用の機械・

施設の動きが順調だ。またタンクのリニューアルなどを計画的に行う酒蔵も多くなっている。機械メーカーとしては、需要減少の中で更新需要

の先延ばしなどが起きており、こうした定期的なメンテナンスや保守契約などに期待を寄せている。焼酎関連は本格焼酎のブームは一

段落したことから、増産目的の新設はほとんどなくなっているが、依然、一部には増産の可能性を探る動きがある。しかし実際には日本酒と同様に老朽化した施設の更新需要が中心となる。また本格焼酎を中心に高品質の新製品の開発意向が強い。ビールは大手に集約されている中で、各社が計画的な施設増強を図っており、現状では計画の延期等の影響は少ないようだ。ただキリンとサ

メンテナンス、保守契約が中心

少量多品種、省エネに対応へ

ントリーの経営統合に関連してタンクなど一部に停滞感がある。焼酎関連も需要減退が続いているが、清酒と同様に少量多品種生産の傾向が強くなっている。これに加え、つゆ・たれ等の醬油加工品へのシフトが見られる。小型の瓶詰め機などの提案が効果を上げている。また、中小メーカーではコンクリート槽からのタンク更新需要が期待されるが、不況の影響で先送りの様相が散見される。

いずれにしても各業界共通の傾向として、少量多品種への対応、さらに環境問題への関心が高まる中での省エネ対策が求められている。期待される海外普及については中国・韓国など東アジアでの実需に動きがでてきた。

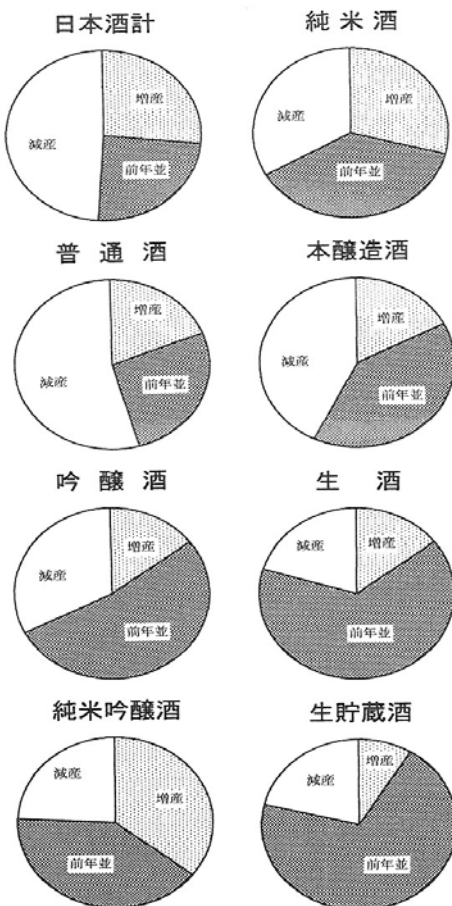
全国の有力機械・資材メーカーのトップインタビューを以下に掲載する。

21酒造年度 日本酒生産計画

本紙・アンケート結果

本紙は新年号企画の一環として、主要500社を対象に「平成21酒造年度の日本酒生産計画」についてのアンケート調査を実施。その結果、全体として「減産」に大きくシフトしていることが分かった。特に最大の数量を占める「普通酒」(一般酒)は、過半数の企業が「減産」と回答。特定酒や生貯蔵酒は「前年並」が主流だったが、増産・減産の比較では、ほとんどのタイプで後者の回答数が多い。「減産」傾向はこれらの日本酒にも及んでいる。こうした中、純米吟醸酒は唯一「増産」を上回った。

タイプ別の日本酒生産計画



ユーザー業界情報 (業界新聞に見る)

国税庁が発表した平成20年度(平成20年4月1日から平成21年3月31日)酒類販売消費数量によると、全国で平成20年度に販売された数量は851万8146klで前年同期の876万1360klに比べ、2.8%減少した。

酒類の販売(消費)数量表

単位:kl

酒類の品目等	製造場 (課税)	酒類製造業者の移出数量				計	販売業者の販売数量		年度末現在 販売業者の 手持数量	消費者に 対する販売数 量計
		製造場の支店等	卸売業者	小売業者	消費者		販売業者	消費者		
清酒	7049	104698	450948	71600	13130	647412	1123901	618249	76827	631382
合成清酒	7249	26016	16955	1021	179	51422	108503	50375	4847	50555
連続式蒸留焼酎	59	237995	156185	8294	483	403021	1163001	456717	64894	457204
単式蒸留焼酎	226	170748	297763	37485	3877	510111	872910	511824	76682	515700
みり	11143	74097	18021	2702	3073	109033	219328	101604	11133	104676
ビール	3795	3052651	85201	7387	7125	3156157	6962553	2976939	148679	2984066
果実酒	15	40264	34621	2591	4314	81801	492434	222683	84076	226999
甘味果実酒	7	1839	1449	183	285	3766	15515	10159	2901	10443
ウイスキー	4	22113	34279	19	129	56547	178866	75915	19830	76047
ブランデー	1	2836	2209	22	11	5083	16865	8719	2807	8730
発泡酒	58	1300484	59174	876	1628	1362226	3076786	1305694	87585	1307327
原料用アルコール スピリッツ	575	113969	64489	220	586	179846	600747	145072	30137	145657
リキュール	8764	1053957	175919	9474	2058	1250187	2929702	1158811	121863	1160862
その他の醸造酒	2161	717866	59968	163	570	780733	1784189	808811	46744	809386
粉末酒	0	37	1334	196	85	1653	25186	28969	2749	29055
合計	41110	6919567	1458505	142243	37576	8598998	19570507	8480575	781767	8518146

注:沖縄分は含まない

製造場数、数量とも減少

国税庁
発表
20BYにおける清酒製造状況

国税庁鑑定企画官室が発表した「平成20酒造年度における清酒の製造状況等」によると、20酒年度は製造場数、製造数量とも前年度を下回り、依然として低迷状態が続いている。

◆製造場数

平成20酒造年度(20年7月~21年6月)において清酒を製造した場数は、前年度より24場減少して、329場。製造方法別に製造場数をみると、特定名称清酒は、純米酒1、027場(前年度より5場減)、純米吟醸酒1、123場(14場減)、吟醸酒1、026場(48場減)、本醸造酒9

◆製造数量

94場(31場減)といずれも減少。特に吟醸酒の減少が目立つ。また、特定名称清酒以外の清酒は、1、041場(17場減)となった。これらの全体の製造場に占める割合は、純米酒77・3%(前年度76・3%)、純米吟醸酒84・5%(84・0%)、吟醸酒77・2%(79・4%)、本醸造酒74・8%(75・8%)、特定名称清酒以外の清酒78・3%(78・2%)となり、相対的に純米酒、純米吟醸酒が増えた。

清酒製造数量の推移

アルコール分20度換算

単位:kl、%

区分	16年	17年	18年	19年	20年	前年比
純米酒	(9.1) 47,402	(9.4) 49,322	(9.8) 51,451	(9.9) 49,844	(10.0) 49,248	98.8%
純米吟醸酒	(4.8) 25,306	(4.7) 24,753	(5.2) 27,174	(5.4) 26,950	(5.7) 28,041	104.0%
吟醸酒	(5.0) 26,334	(4.6) 24,227	(4.8) 25,205	(4.2) 20,946	(4.4) 21,691	103.6%
本醸造酒	(13.6) 71,064	(13.1) 68,182	(13.5) 70,616	(13.2) 66,188	(11.6) 57,094	86.3%
(特定名称清酒) 小計	(32.5) 170,106	(31.9) 166,486	(33.3) 174,445	(32.6) 163,928	(31.6) 156,074	95.2%
特定名称清酒 以外の清酒	(67.4) 353,127	(68.2) 355,795	(66.7) 349,847	(67.4) 338,593	(68.4) 337,562	99.7%
合計	(100.0) 523,233	(100.0) 522,281	(100.0) 524,293	(100.0) 502,521	(100.0) 493,636	98.2%

(注) ()内は、構成比(%)

今号の一言

『2種類の人があります。「行動を起こすタイプ」「チャンスを見逃してしまうタイプ」・・・あなたはどっち?』

by ドナルド・トランプ (アメリカの不動産王)